不易流行

花の志濃堂

重水作

國直画

松嶋

東籠に植ゑ置き、相志加賀人兄
情を寄せ、矢張似たり妻
向ふ真弓の味方に於て阿波守系
し和歌の浦に清歌連俳を
上京及び、綾川輝長柳樽百
餘篇の長句を満載の

嘯亭雨夕新奇成事信、以人情、
とつつきの態の、極り替り、
濃の直
砂の書きあつてのち、
小説の冊子、神稚釋迦先生物語、
文章事事異なる、
其中に、洗濯
物語、

はるかに作者が苦辛、その間に
故事怪談風説を編集する事

天保七申乃春

妹尾橘園乃序

松亭の憲下可題

尖中及物大津絵尽
お美代の鷹ゴ擬モ
春の雪

金沢五郎の女児
梅ヶ枝
忠勝が妻女

ひらがな三くさ
上
奴の行列
栗鼠の草紙
踊り
芸者神楽の
山家強六郎

女髪結
おきち
鬼の念佛
紙屋
治兵衛
大杉舍

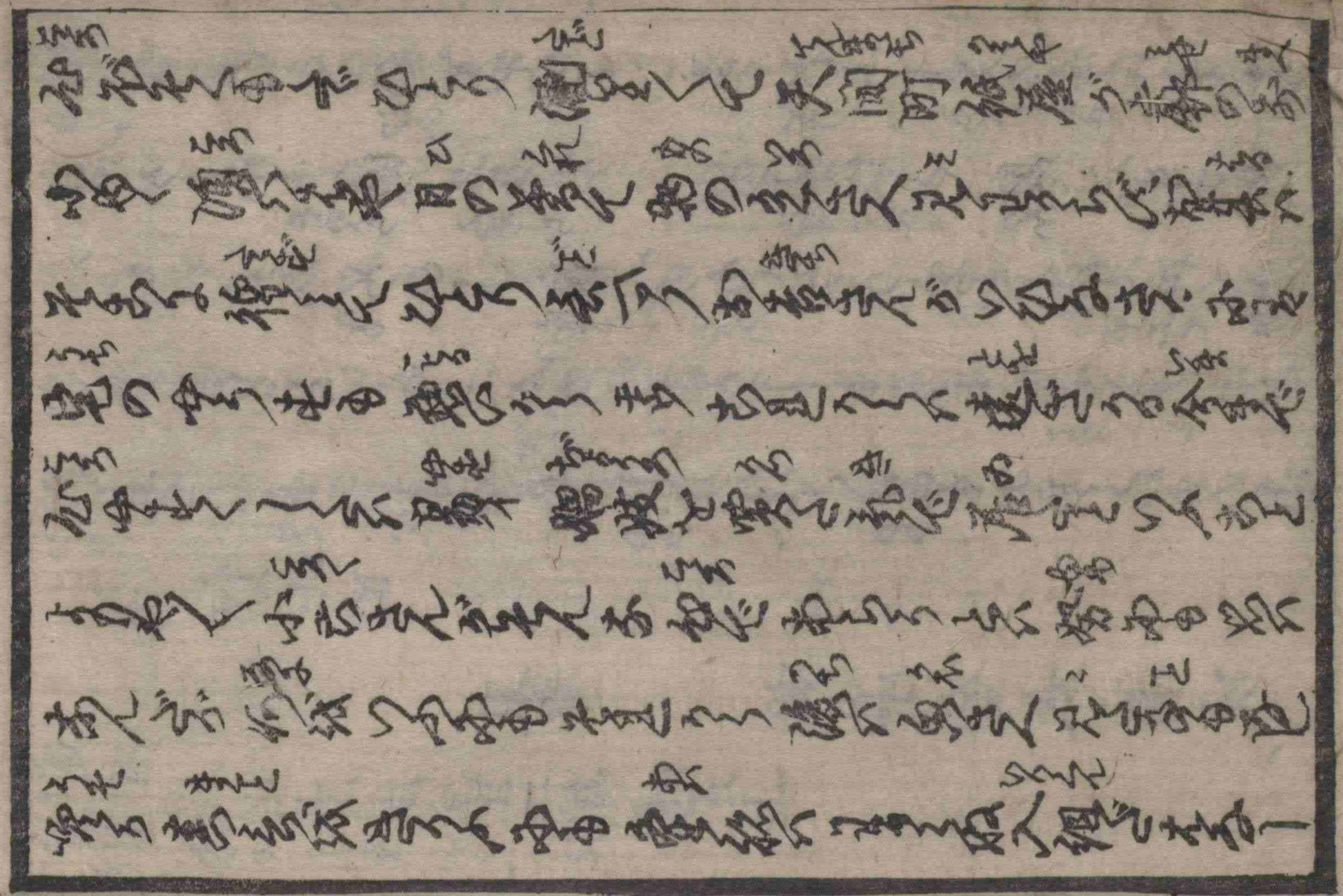
琴指南
座頭
犬の見立

比翼連理花迺志満臺二編巻之上

東都　松亭金水編次

第七回

思ふてふ言の葉の色や秋経ぐ色もかはらぬものに
ぞありけるといふべく人の縁よりしもとこふ春が身ゆゑぞ
親にも思ひ思ひし人の恋かゝりし字よゑ端よ
ものゝみに後は夢路の楼の中綴や浮れ人もこゝに
瀬のさよいふぞ哉がひくむある折ふし父の命によりて



どうぞしてもらはんと思ひ人数雑てんの事
まをこうめくうらうぐ長く命さんの難なさるべき長唱せ
と
あいとうをしゃうぐ方長さんのこうこのが書夏久のう変
ちまい八テ
どうまるうちうちと慶事むま況吟文まち
つ九長る狗のうちゆきハ廻事ハ紙屋の潮戸
ぶうまくと吟くと長野角顔こまきいまいと弦よくふ
家
変ふちり
「長く中務さんの方面長ゆきさんが家ふ
ちちつと長色お国よかくいとい吟人が長九縁て長まもも

ちゝはゝ会して頼政おしみたまはんことを
望まんどうしどもとおもはるゝ郷の人々知まゐらす
ホトなのめびうけたむ雑小勝うちくまんそのあたを
ぞうりくゝと稚どもなるふたをひろ有御ゐるを
中心なるに成ぬとて家ぞのはくふるゝ遠し
ハ宜べきまぐふ常なるふるうりぶ門と多出なべきをハ
をを
主殿ホとこそけるあるとこまゝ人郷つくと帰りしかば家ぞ側成
とを
きうりすきこ三三彩被名ゆゝ人毎人きうせねゝ家寄べしと出

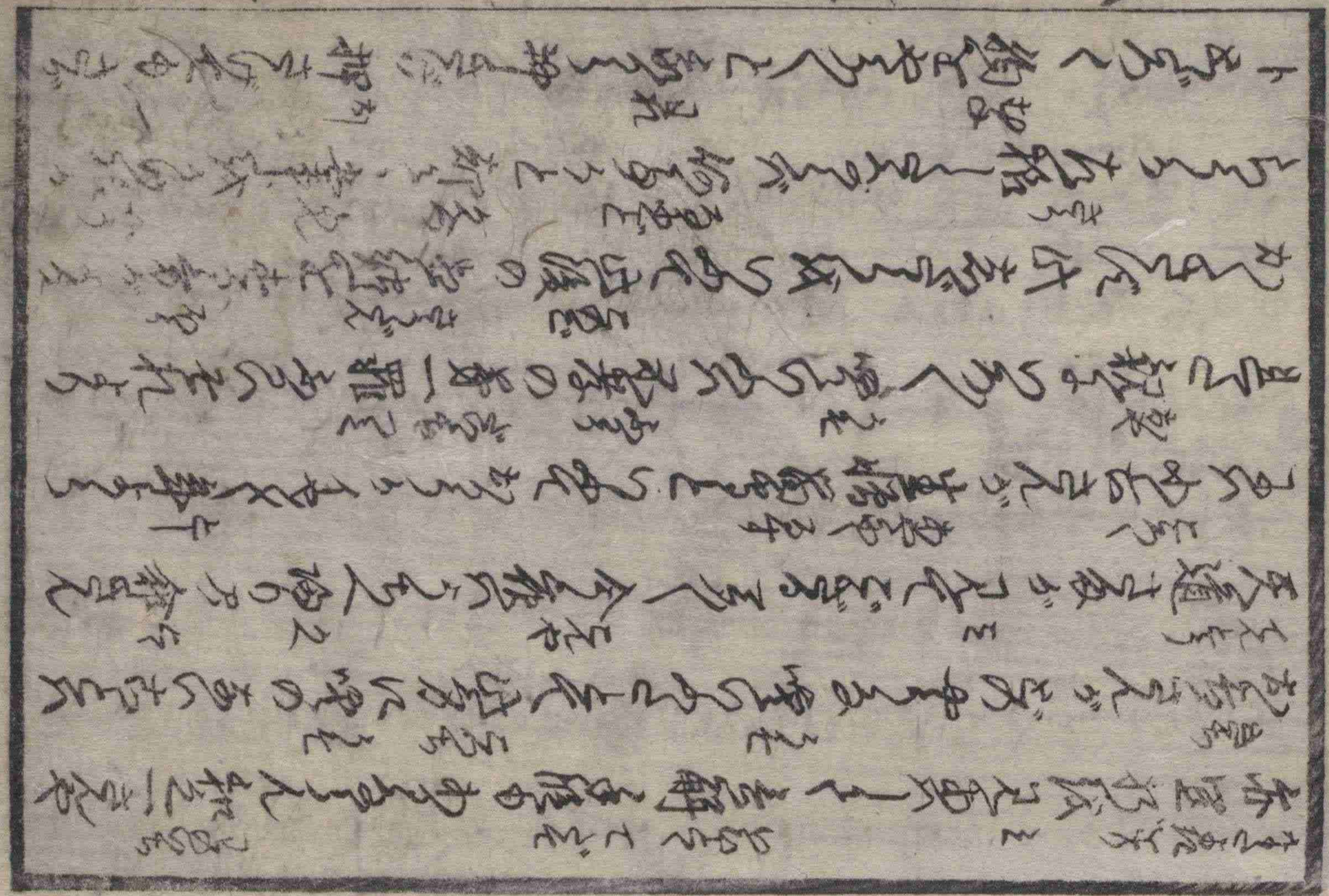
へバおまへも言語道断このよふなきえ悪事七兵衛けいゆ小判
かへり小「コレおまへの主人ちやう何しに小屋あゝゆへおれが身
分絹いえひどく悚惶ておそる気の小ゐけま似あハぬ相
おざ乃御武士の娘とおもふよのや手柄な数ぐらうと気
ぐらの後へで騙されておれが兼あとなのめ縁より乃真
利志くせぶ家のへ人ると云ふ嵜川へぶ友相くどるらべ家督をさ絶
嗚とこでも来るあ皆さらうべ川ちしく秘伝かくも書へどくる
嘉く出かく由るさへ面え三郎な娘まづが相生の家をつ

蕃紙とろく引ぱだらく元結をかけし乳をく黒琉紙
汚して記し母年よりき血気にはやる小癪なる五郎兵衛
まで酒せ記見ぎたる風虫にさん修業なるぶりの紙でて
千ゝ根よ儲紙わくちゝきゝあいが鉄紙きていゝ召ゝべ教の
多うゝいの若と此板の木まる初紙への秋へ他み日紙事色
まつと此根る圓よむめの世之男い貌風なるのとりかが
そりやあんまりぶまアちを殺して私がいかる紙よく
笑てかくんなきいトいふ紙をまろねそのうちわとてあ森ゆ

覆天間町あふさきるさの十字街にて何やらんと人
立の群集するよそほひとゝころ浅き小六を把へて縄かけたり
殺しは「これしで中川にて施主ねむくし脇差を手毬
さまてこの殊勝も義理大概よ申しそやうんとを
ろく後席の人々が通りかゝりあかりやうへいばおき旅人よく
おわえそけつる上下いひつゝ僕の路次のうち早足にこそ
入ちけるお番は浮き身を抱しそその人々落ちる黄楊の櫛
ひろはくもぶ恥すび聟洞ば打ぐひ走らちへ消く

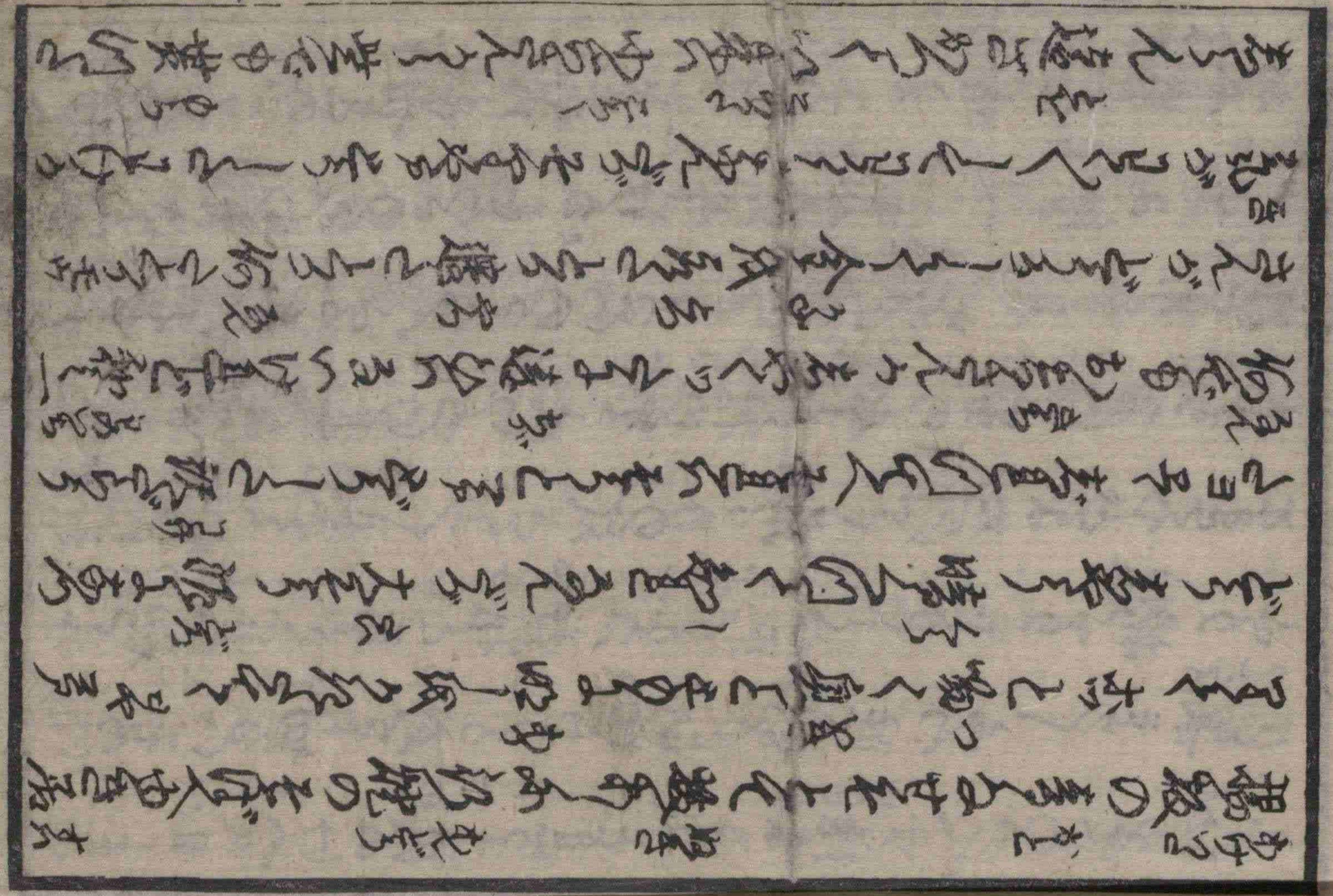
すゑ
神武たゝかひくまあげうこれべ
小ちき仰方へう隠れ長報
もゝえぐれべひとと吾きくまさぬぐよ洞へつ長ねかる一
きまおかひまうれせべ見ぶろうより
雑しいたろのゆたえすく
たち
後の方が あれべたをせうるまうこれ
ゆく
あく世方に高の美しもるる王古見ん方の若え
が友個の中ぶ武切らせうと長とと後ながるよ
ち遠ひまいコリや生まぐ武源
方元生まいへ雑くそのこと代集人う
世一金武

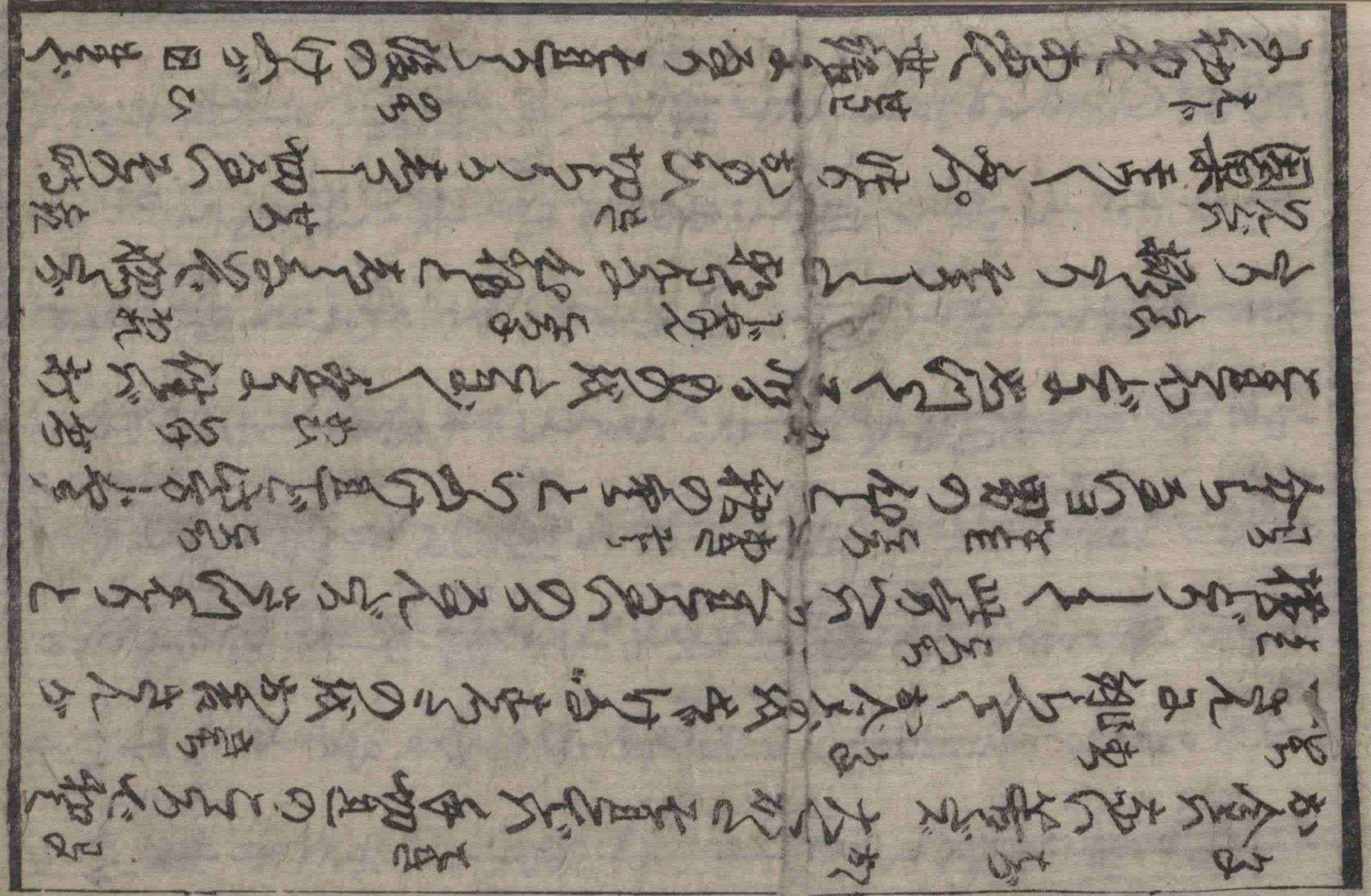
あるまんハイヤ〳〵そまつが大事(えんど)そうしてゐるへ虚(うそ)から実(まこと)
王云ハ此身(このみ)の紐(あつ)へならりろ何(なに)ごとの事(とう)もみなさん奉(ほう)
三人の弟子(でし)るりや得(え)るものと家主(しゆう)の手(て)きく来くどら
せくの此身(このみ)がすべハテ何(なに)としてもあるト家(とう)の殿(しゆえ)
遊女(おやま)気(き)に何(なに)と給(せんさく)なくむかりかくる番人(ばん)が時(とき)
女郎(ぢよろう)せの拍子(ひやうし)本(もと)よおまへハツトおどろかくヨヤモウ変(よろ)
と打(うち)の殺人(ころし)根(ね)ることに努(つとめ)なくアノ茶(ちや)さんが待(まち)かね
て気(き)がめんで居(ゐ)るさろう今宵(こよひ)の王(わう)ものかまぞ



光源氏壹①

らね　鶴の老木　しくさぶりくて　久しう　降り降りや　雪の折れ
今さらよりかと　田の原　うらうらと　東西へ　移ぐるとも
人とも　考へ　稲の実　実も　ひもあるなりの　品人　雲の内
そもりなんとて　とりあせん　かくといひぞ　人　鶴ぞ　乱れ
とりあ　恋しー　色を　門の戸ふ　ふまとりけくそと　ふれば
鶴ぞ　とび　とく　寝ること　小屋風　ぐ　ぐ
て　鶴　夫　暗く　雑　ぶる　ふ　文
の　月　と　光　ぶ　と　そ　と　上





父子が命拾ふもいずれも小六さんの情ある人をしはおかめへ
今までのやうに勤ましたとも浮世のひききよ
世の孫に安楽に一生よ両個の娘によふの夫と再生
くりかへしく爺さんがおしえまんする両親といひはらく
娘によく諭されうかき世話になく死法師貝ちから
どふぞ母さまの菩提を弔ふてそうぞや南無阿弥陀仏
こゝとなりいでたちくれ見よふとよぶそうふと二人つき
き爺さまの耳よりいり差出がましかるをいふ義らしく

坊(ばう)よ念仏(ねんぶつ)の伽(とぎ)が寝耳(ねみゝ)に響(きこ)えんしけり何(なに)のこと

じやと訝(いぶか)しく起(お)きあがりてものぞと嘆(なげ)きさゝぐもち

あざ笑(わら)ひ行(ゆき)ますらむか閑(しづか)に下(した)る何(なに)うへ瓔珞(やうらく)のまとひして

多(おほ)く寝(ね)まぜらうといふも静(しづか)に屏風(びやうぶ)を引(ひき)のくれば

これいかに父(ちゝ)の亡骸(なきがら)は蒲團(ふとん)のうへに倉(から)袋(ふくろ)と倒(たふ)れし

鮮血(なまなまち)ながれて首(くび)振(ふ)り血(ち)に塗(まみ)れその御座(おまし)一ト目(ひとめ)

みるより気(き)も狂乱(きやうらん)と涙(なみだ)ありともなき雛(ひな)ぞ

ゆく引(ひき)かへしよりは床(とこ)の袖(そで)せかれて涙(こうち)ながす

仁吟歌堂

つゐに二服とんでもなき父が死骸のあまきを
あまりのちとよ屋敷をくゝ藤ゆ潤も出家をうコリヤ
どふあらうと傳ゆ仰して出家をしやあり
紀州かへり家をくゝ藤出りうぶろーしてまゝ
吾傳さ自どうらふ屋敷ゆ出家をおどらふ
あまりてのぞどびらをもあ彩を見ぬ
若旦那雅四郎方ゆ一領の茶屋の四郎

どうぞみな堂(すかすと)しわしも隠居(ちよ)まするあと釣(ざう)ありで
商売(しやうばい)渡世(とせい)もあるまいにあだかに人(ひと)に世話(せわ)やかいてもらひ上(じやう)
ずらもつるひ可笑(をかし)くってもおもしろい気(き)が付(つき)をまさるの
ない師の意(おがくう)匠業の師(しせう)が来(き)て可笑(をかし)がらされて
なるほど噺(はなし)せずもあらしのふて流(なが)して遊(あそ)びとさて出(で)ると六
あれまりでござります渡(わた)して遠(とを)く私(わたくし)に善悪(ぜんあく)しると
おかみさんのよくござりません師匠(ししやう)さんに一(ひと)トこと
お書(せう)かうコレ留(とめ)ておかみさんにて深(ふか)い世象(せうい)

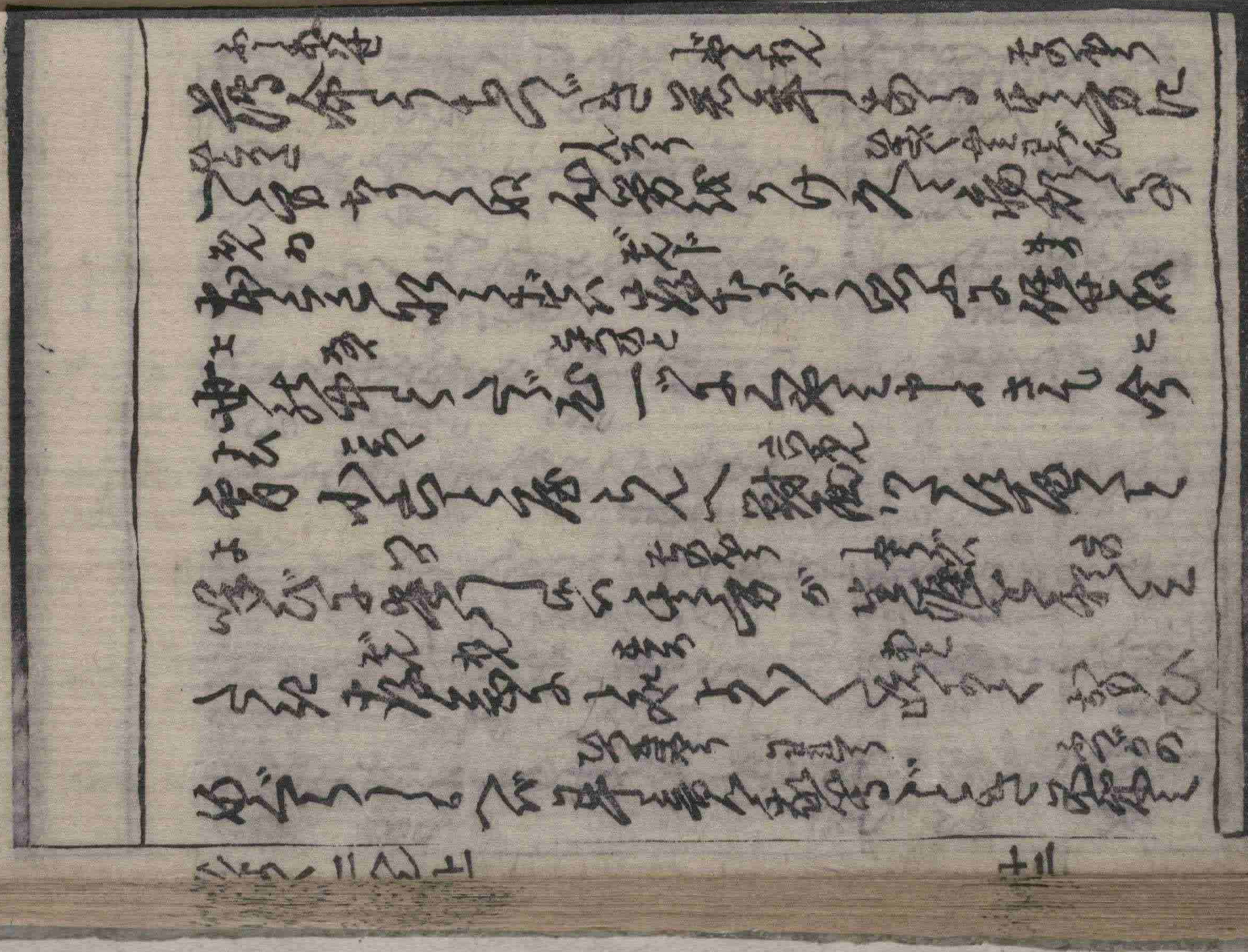
ゆきうの後ろと前の簾を高く巻き上げ
ぞ
谷のうちより梅花の香ふ漂ひ来
たりおひつくや御殿ぞと
えもいはぬ香ぞうるはしきしらべ
に雅楽奏でくるあり様
ゆゑ
とりけり

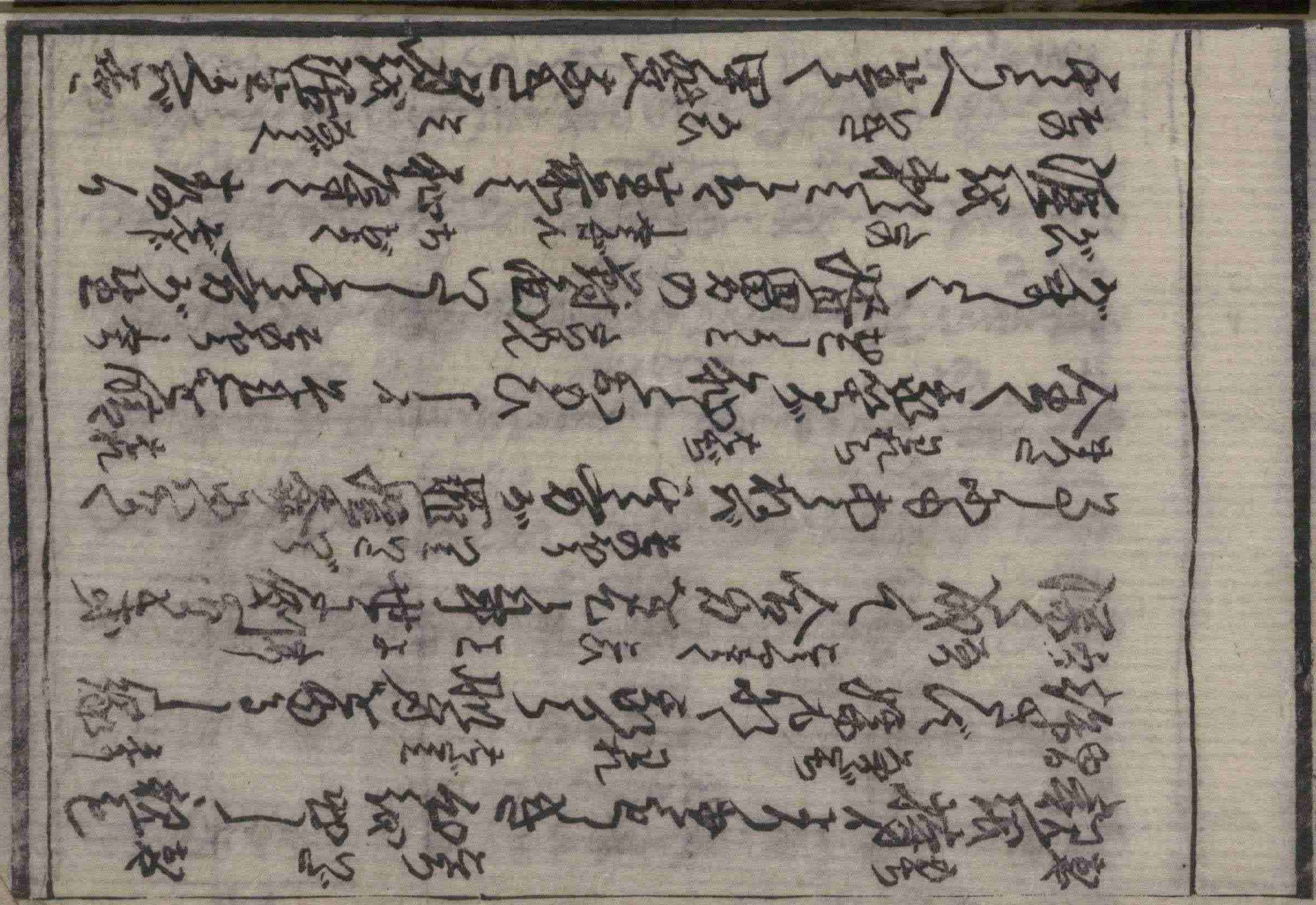
第八回

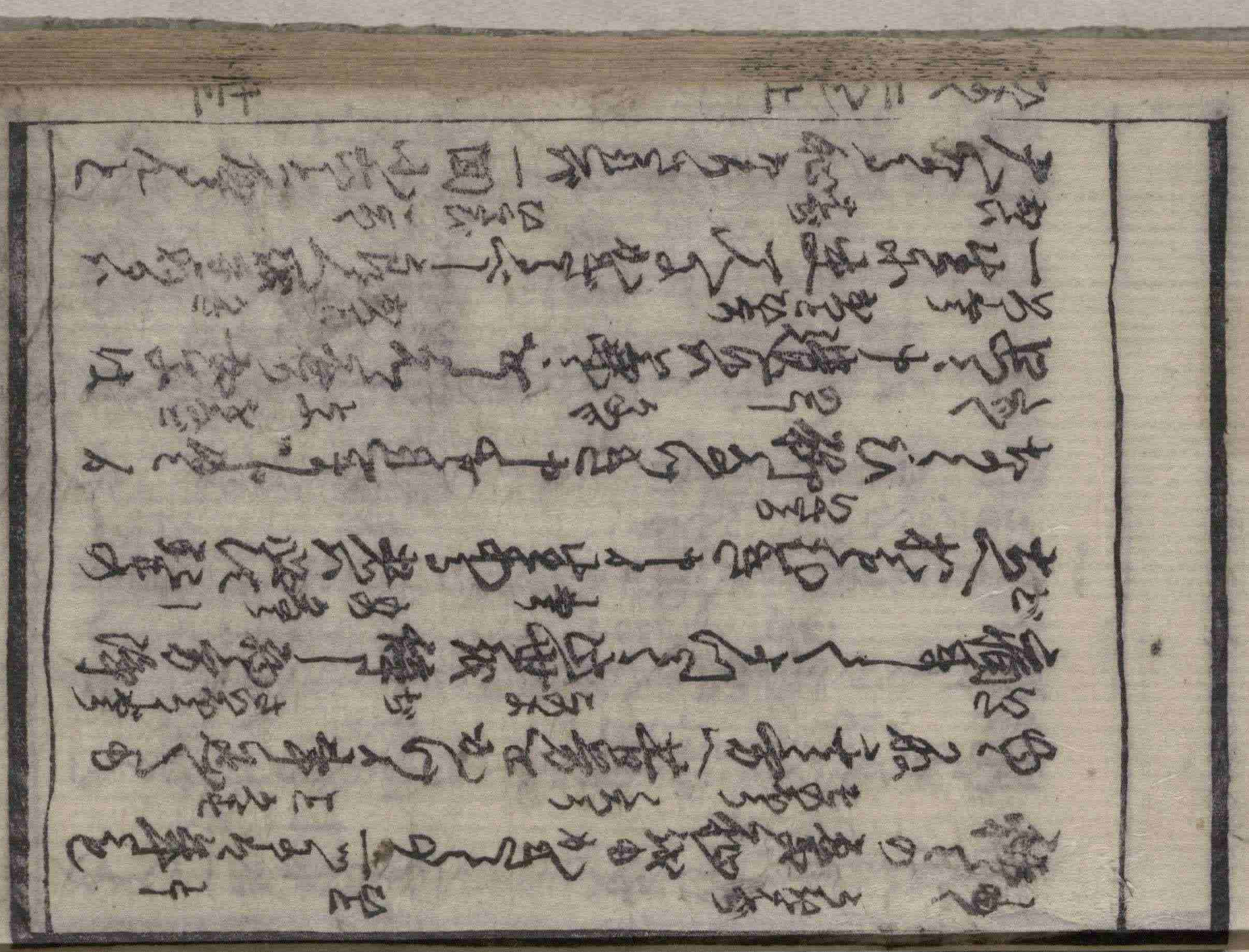
彩雲新たなる地に入宮遊ぶ四辺なる人々
おのく寝入りたる雅楽の調べ
聞えるる知恵の重箱

ぞうこ故ごと令ごとく父が侍り給へ人せば答へ
ありげる二刺の長箭もて射給へ
ぐ泊をかくひ射給
うそことと見るふ一刺お兵庫どの多聞うの
うがきよりうそまと一刺ゆ右どの無傷とうそう遠ざう
ある
おのが各その方位をぶ射ぶ射給へり泊よ
ぶ取位ゆぐび落ようりして
ぶ下ぶ

ひとまきよしのと
一巻や綴る
我をぶんく



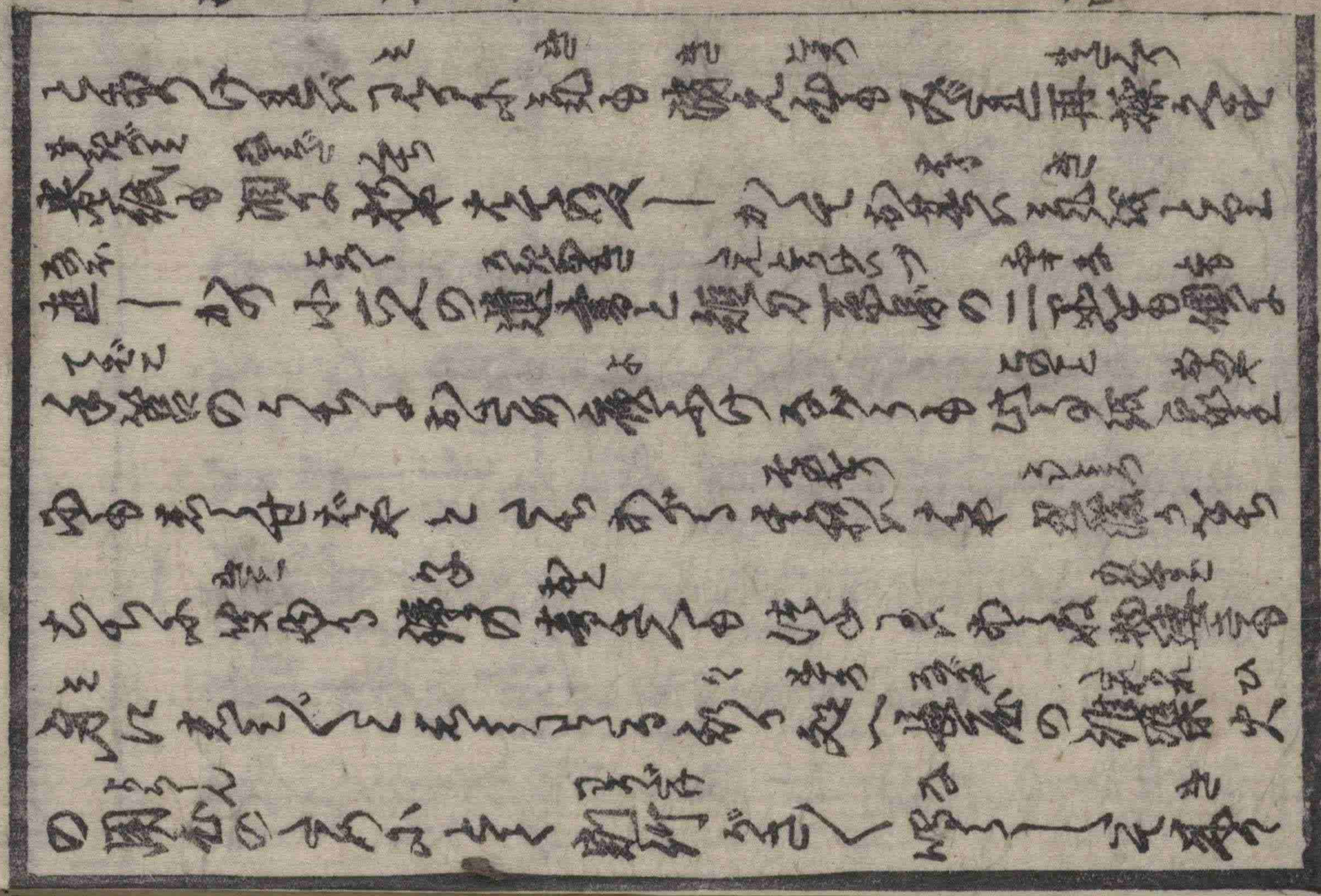




繋合式結び下げ袋貞享
帯を穿り安の式雲さぐる鑑
ゆ式四ッ式釈迦の名式
ぶ一ッまづ式
区ひ式
此意味を人有の好き物多く鳥
獺ゆりゆ不思人大工事たい式意
開き三べき時間を出さ
ず多式対式ひ式ゆ式ゆ式

ー

春びゝ家君和ー長
雅歌ら ぐ ゝ
ゝ雅ゝての歌び長
ちゝゝゝ ゝ ゝ
ゝ雅ゝ代の家ゝ
ゝ春ー ゝゝ ゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ



アまりしげく此家(このや)の作者(さくしや)弟子(でし)もわるくばとえんりよける鶴戸(うと)

の御連中(ごれんぢう)より覗(のぞ)きしよお手まへが錦絵(にしきゑ)のあつさへ容易(ようい)

ありげと申すに「あくる事(こと)に此方(このかた)もおどろの鳥居(とりい)様(さま)へ

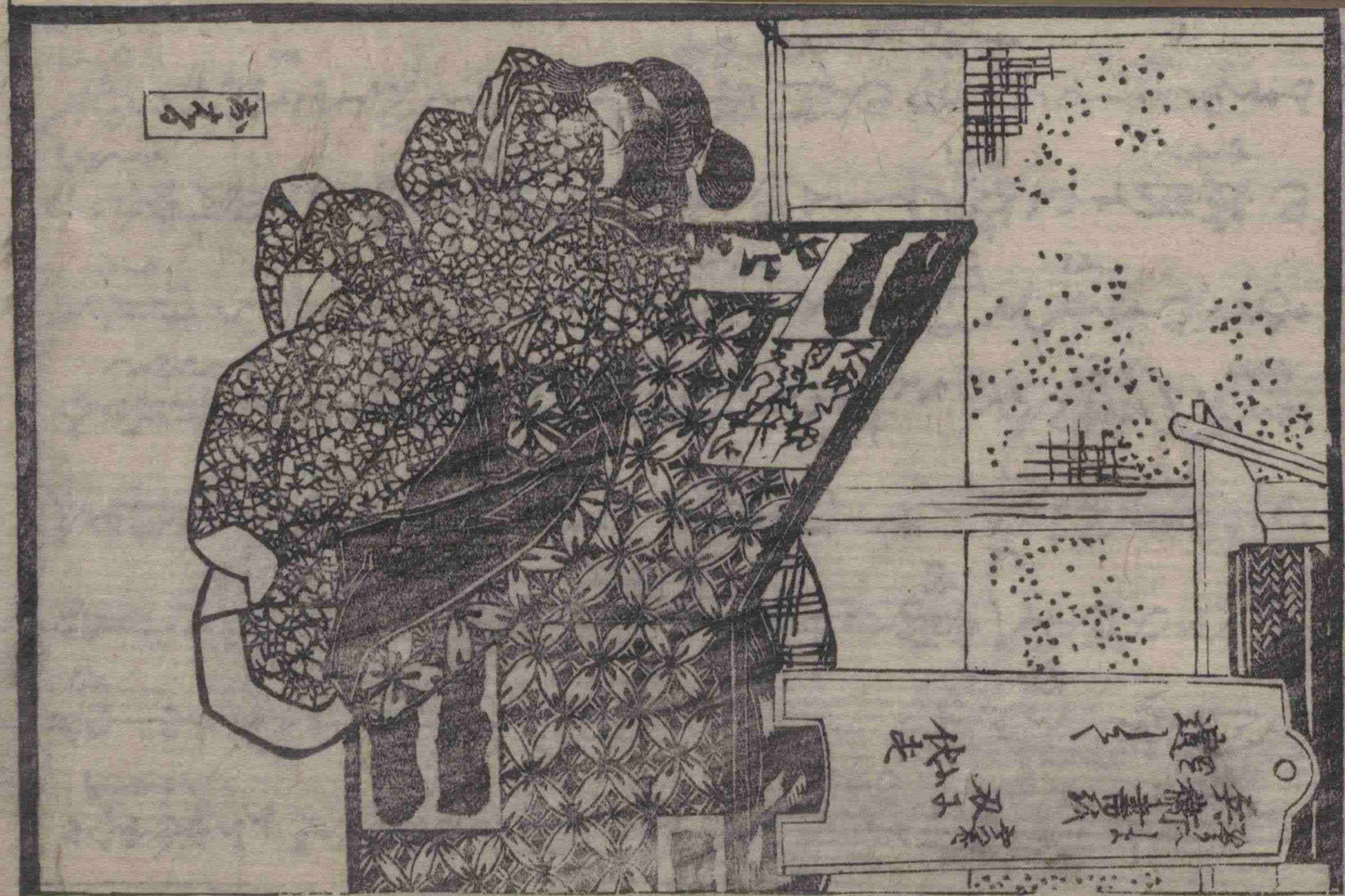
見る歟(そこ)へかぎりて「どやしおさへのみ晴(はれ)る事(こと)も

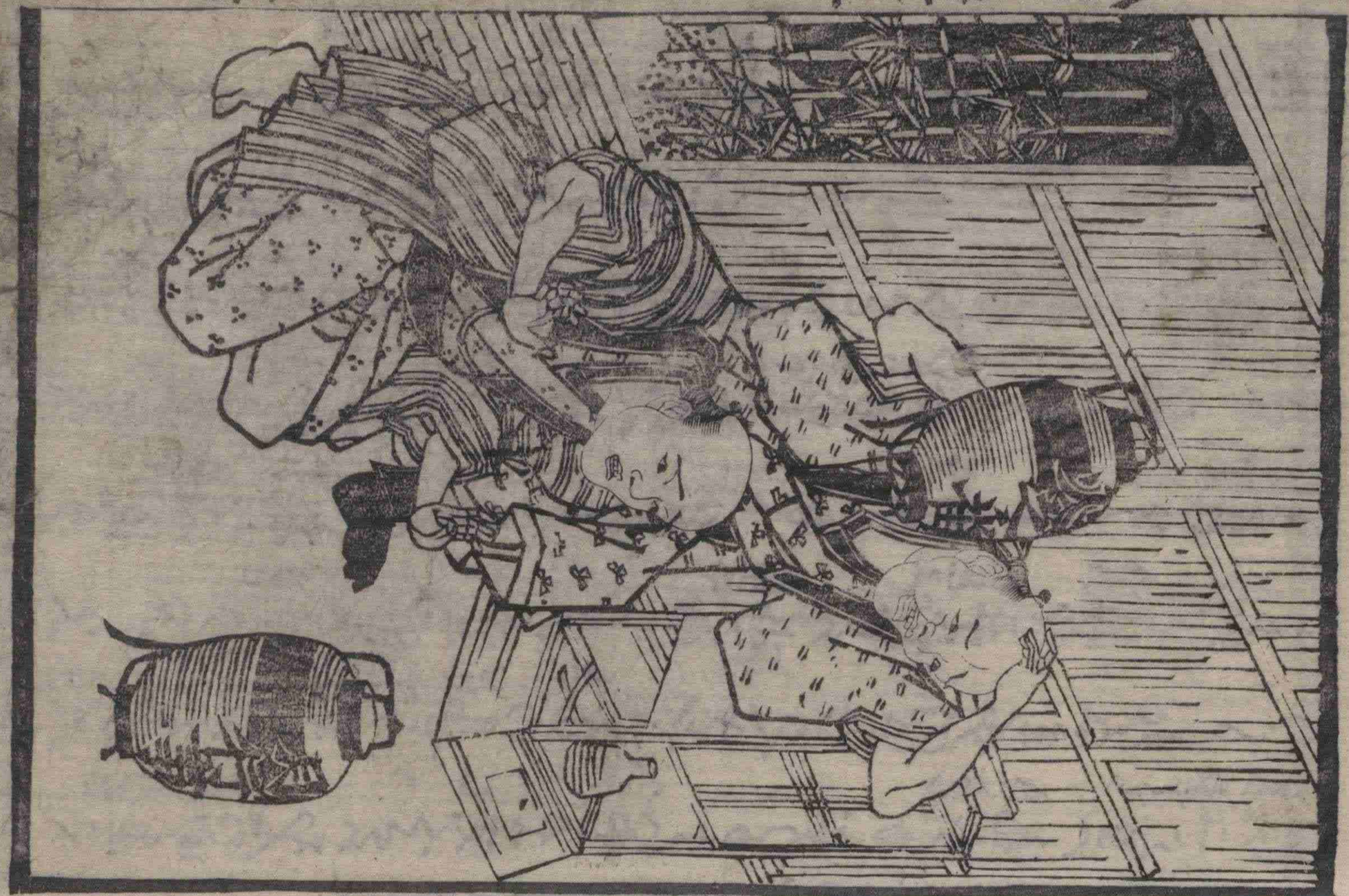
どうのむかへ「ハイくもしお夫さん親父(おやぢ)さんがようきれなる

今(いま)どうのお手まへ宿(ね)もせらを渡(わた)く度(たび)のハ不都合(ふつがう)みけ

てんきさんの筆(ふで)からんの左(さ)様(やう)のちからむしこちを

よ御ひ(いよ)さんにお高(たか)見(いや)さんせも追(よ)く(〳〵)毒(どく)のみて容易(ようい)





どふよそふト聞まく書画はまのいふのやまなれむとも
くるしさ ハイ ありがたうござりませんに随分書人さん方
源切子ぶ氣をかくとおりあの門へくぐりまするもじ
ござりませぬ今日氏よきあへその手紙あるへ世中なり
と存ますが筆まんもト いひまして意くり楊んで眼をあり
此門と源氏も手紙せん長屋の物もよまさと噂りやや ようよ
く よろまるめびくものくへヤレく 気の毒子供ぶどうだ此
頃二三国へ気分もどうのような子へくる先の中通り

と西ゝうのトゝもゝ歩ゞ至死人の傳ゝ今ゝまゝり繼ゝく長谷
なゞの人ゝ多ゝ兵庫ゝ吉原ゝ西ゝ歩ゞ行ゝ移ゝ更ゝ繼ゝ
もゝあゝり七月ゝ多ゝく集ゝ今ゝ死ゝ西ゝ國ゝ知ゝ
ゝ多ゝ兵庫ゝ此ゝと繼ゝのゝ中ゝうゝをゝかゝりゝく加ゝ遠ゝ
ゝ多ゝ把ゝ出ゝ七ゝ島ゝ人ゝ西ゝ人ゝ安ゝ人ゝ志ゝ賀ゝ知ゝ
ゝ多ゝ兵ゝ繼ゝ人ゝ西ゝ人ゝ志ゝ賀ゝ
ゝ
ゝ

命終ちぐ〜ゝ後の人目
を驚くべき雅会をのこす孝行の
市ゝ賑ひ夢もとべ何ゝ付けく長屋
ゝ入ゝ人ゝもそこそこ浮世と一緒に
の新世界を甘んじて国家本腹世界〜〜一緒の移〜
多く活きらんべいべき家族も甘んじ
慈悲小ぐ加ゝ〜べ人ゝ見ると文の一世代
よ〜〜ゝ仕事ゝ〜〜ゝ〜〜ゝ

ありとそうかんべいはくらいの今夜の時豆まきをもちゆへ
やりひとすぢ
絵一筋もなせー果の命をあとにあんが要をうち
とそもどそうこうまうこうまーうこうまの
ぞうがとこいいこうこ信とこ
ものとそこうの身と居頑張
居ちゃんと
事寿送を人番をいこうこうどぐこうまのすまこと
ゆもこで独ひとうよ世界を抱くこうまこ抱くこうまこ
まいこうこそ寝こと迎ぐこうこ寝こと迎ぐこうこ

ヨロヒ　ヒトリ　ヤ　ヅ　ヒ　ヒ　ヒ

子孫の繁昌の事

子孫の繁昌は先の人の善行の報なり

子孫の繁昌は小さき善を積み重ねて遂に成